
一つの異世界

南津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの異世界

【Nコード】

N0626Z

【作者名】

南津

【あらすじ】

四季一しきいちは大学に通う21歳の青年。中性的な整った顔立ちで、日本人らしい黒髪黒目。両親を幼い頃に亡くし祖父の家で暮らしていたが3年前にその祖父も亡くなった。両親と祖父の残してくれた遺産で大学近くの賃貸マンションを借り、階下にある洋服店でアルバイトをしながら一人暮らし。海外への短期留学の際に事件に巻き込まれて死亡、異世界に。膨大な魔力と特異な能力をもち、一人で異世界に放りだされたハジメの物語。

第0話<プロローグ>（前書き）

初めて書く物語ですので、文章が拙いものになっていたり。主人公最強物になりますが、戦闘が多いわけではない、と思います。バツサバツサ敵を斬ったり殲滅したりにはならないはず。ゆっくりとした更新になると思いますが出来るだけ長く連載をしていきたいと思っています。

第0話<プロローグ>

「……」

僕の人生が終わった。

21年。今日までの人生を振り返って長いのか短いのか。

天寿を全うする者からすると短いだろう。母親から生まれて学校に通い、就職して退職。子供を育て両親を看取る。残りの人生をゆつくりと過ごすのが人生の目標だと言う人もいるだろう。

80年。だいたいその80年の間に人は様々な事を経験する。

僕の21年はどうだっただろう。

幼い頃に両親を亡くし、祖父に引き取られて中学・高校に進学。祖父を亡くして大学に進学。借りているマンションの一階にある被服店でアルバイトをしながら生活費を稼ぎ、親の残してくれた遺産で大学に通う。

在学中に海外へ短期留学し、その海外でテロに巻き込まれて死亡。

そう、銃撃を受けて死んだはず。

「……ということはどうゆうこと？」

目の前に広がっている風景はテロ巻き込まれた場所じゃないことは確か。

人が溢れていた街中の景色はなく木漏れ日が溢れる森があった。辺りには木や草のほかは何も無い。銃で撃たれたはずの胸や腹部には風穴があいて……いない。

「撃たれてない？ いや、確かに撃たれた……はず」

マシンガンみたいなので撃たれて死んだ……いや、死んでないけど。とにかく此処が何処だか分からないからな。とりあえず森から出るべきなのかな？

「まあいいか」

とりあえず森から出て人を探すことにしよう。此処が何処だか分からないんじゃないし。日本に帰れないし。

今日は留学先から日本に帰る日だった。チケットも買ったし……

「……って、あれ！？ カバンがない！？」

今気づいたが持ち物が何も無い。チケットも財布も他の物もカバンに入れていた。大体のものは自宅に送ったが……

「はあ、パスポートもない……」

ポケットを探ったが中には何も無いみたいだ。

「どうやって家に帰れというのだ」

お金もないし、こういうときは何処に行けばいいんだ？ 空港？
大使館に行けばいいんだっけ？

「とりあえず森を出ようか」

どちらに行けばいいのか分からないので少しでも明るい方に行くか。

「……」

しばらく歩いて行くと何やら物音が聞こえてきた。人かな？
森といたら熊とかだけでもそうそうエンカウトするようなもので
もないだろう。……海外なら狼とかいるのか。

「怖っ」

少々寒気がしたが大丈夫……だろう。

……念のため石と木の棒を拾っておこう。

人じゃなかったら怖いから……慎重に近づくとしよう。

物音のするほうに気配を消して近づく……祖父に習って剣道を少し
やっていただけ気配消す練習なんてしていない。
気分の問題だ。

近づいてみて驚愕した。

「なん……だと……」

なんて言っただけを紛らわさないとやってられない。

熊みたいなのがそこにいた。体格的にみてそう判断したんだが……
これはヤバイ。

その熊を更に大きな何かが貪っている。

ヤバイヤバイヤバイ！！

熊や狼ならともかくあんな物に襲われたらあの熊みたいになっ
てしまふ。

可及的速やかに此処を離れなくては。足音と息を殺して慎重に離れ

ないと。

此処でお約束の枝なんか踏んで物音を立てるようなドジな真似なんかしない。

慎重に……

ガサッ！

「っ！！」

……決して僕じゃないですよ。ホントに。

物音がした方を見ると何やら小さな動物がこちらを伺っていた。

「……」

振り返ってみると其処にいた何かは此方を見ていた。

いやいや……勘弁してくださいよ。

「っ……はっ、くう！」

引き離せない！ どころか少しずつ距離が縮まっている気がする！
とりあえず明るい方へ走っているが後ろのストーカーが諦めてくれない。

だんだん足音が近くなっている気がする。

僕は美味しくないよ！？

絶対さっきの熊みたいなやつの方が肉も多いに決まってるよ!!
何でこっちにくるんだ。

泣き言を口から洩らす余裕もない。息が上がる。足が上がらない。
足には自信があるが足場の安定しない森の中で必要以上に体力が奪
われる。恐怖で緊張し更に思うようにいかない……

「っ……!!」

瞬間、背筋に悪寒が走った。

咄嗟に横に跳ぶと今まで走っていた所を何か大きなものが過ぎった。
目の前に出たのは毛皮に覆われた何か。さっきから追いかけて来て
いたやつだ。よく見ると狼に似ているが正面から見ただけで自分の
身長を超えている。顔は真っ赤に染まっっていて先ほどの食事の
跡が窺える。

既に立ち上がる気力すらなく恐怖に震える。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

それは此方に向けて跳んできた。

恐怖が膨れ上がり体の奥から何かが急速に広がる感覚。

そこで僕は意識を失った。

第0話<プロローグ>（後書き）

おわり……え？

まだ主人公の名前も出てないので続きます。

第1話<四季>

「……ん」

（体が重い。なにがあつたんだ？ テロで殺されて、それで……）

微かに意識が戻った青年は地面に横たわったまま回想する。

（森の中で彷徨って……）

「美味しくないよ!？」

「……っ!？」

食べられる前に見た光景を思い出し、叫びながら勢いよく起き上がる。体は重い感じがするが特に痛みは無い。

（味見もされなかったのだろうか。）

あの状態で無事だったことが信じられない。あの巨大な狼が目の前に迫る瞬間が鮮明に思い起こされた。背中を冷たい汗が流れる。

「夢……か」

無事なところを見ると夢だったのだろうと考える。妙にリアルな夢を見てしまったようだ。最早何処から何処までが夢だったのか分からない。

（テロに巻き込まれたのも夢だったのか？）

「目が覚めました？」

「え？」

不意に声をかけられて其方を見ると、其処には見たことも無いような美少女がいた。年齢は青年と同じくらいか、少し下の金髪の少女が椅子に座って青年を見ていた。艶やかなロングの髪は少女の整った顔立ちによく映える。透き通る碧眼は青年の姿を捉えている。少女の姿に思考が停止し、しばしの間惚ける。

「……………」

「……………聞いてます？」

少女は何かを青年に話しかけていたらしい。

「あ、すみません。聞いてないです」

惚けていたことを恥ずかしく思いながら何とか返答する。

（あ、聞いてないですなんて失礼だよな……。まあ実際に聞いてなかったんだから仕方ない。）

「……………。ディゴウの森で何があったのか教えてもらえますか？」

聞いたこと無い地名に青年は疑問を口にする。

「ディゴウ？」

「あなたがいた森のことです。二日前あなたが倒れていた森です。覚えてないですか？」

「いや、森にはいたけど……………二日前、ですか？」

（どうやら二日も眠っていたらしい。ということはもう九月になったのか。明後日からバイトが入っていたっけ。帰るのに時間がかかりそうだから後でバイト前に電話を入れておかないといけないな。留学で結構お金を使ってしまったから少しバイトを増やした方が良さそうか。大学卒業してしばらく暮らすには問題ないが、親が残してくれたお金は出来るだけ残しておきたい。）

これからのことをつらつらと考えていると少女から再び聞き覚えの無い単語が聞こえてきた。

「ええ、今日はテルトゥリアー巡月の七日です」

「……テルトゥリア？　って、なんですか？」

とりあえず疑問をそのまま投げかける。彼女の言い回しから今日の日付を言っているのだろう事は推測できるが。

「……大地の神の名前です」

「大地の神？」

「ええ、風の神ヴァンテセラ、火の神フォティエナ、大地の神テルトゥリア、そして水の神オースイオ。その名前は風の季節、火の季節、地の季節、水の季節のことも示しています。常識ですよ？　覚えてないんです？」

「いや、そもそもそんな神様なんて知らないですけど」

「……」

「……」

二人の間に重たい沈黙が流れた。そんな神様の名前は青年には聞き覚えが無い。それに、四季を表すのに風や火、地や水を用いることもなかった。

（この際分らないことは置いておいて現状の把握に努めることにしよう。）

「……えっと、ここは何処ですか？」

当たり障りの無い内容から確認する。意識を失っていた人間の常套句だ。

「……ここは私の家です。貴方はディゴウの森で気を失っていて、色々と聞きたいことがあったので保護しました。森で何があったか聞かせてもらってもいいですか？」

彼女も様々な疑問は置いておいて聞きたいことだけ先に確認することにしたようだ。逸れていた最初の話題に話が戻った。

「それはいいですけど……それならあとで君に聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

（此処が誰の家かは分かったが、此処が何処かという疑問は解消されていない。後でもう一度聞いてみないといけないか。）

「……いいですよ。私はフランシエシカといいます」

君という呼び方をしたためか彼女は名前を名乗った。そこで青年も自己紹介をしていなかった事に気付く。慌てて謝罪をし自己紹介を始める。

「あ、すみません。僕ははつ一といいます。四季しき一です」

「シキというと季節の四季ですか？」

「ええ、四季が苗字で一が名前ですね」

「みょうじ？」

フランシェシカは四季は分かるのに苗字が何か分からないらしい。

（外国の人みたいだからかな？）

「あ、えーとファミリーネーム？ 家名ですか？」

「ということはハジメ・シキですか」

「そうなりますかね……？ あれ、そういえば日本語が通じてるんですか？」

（日本語で話しているつもりなのだが、此処は日本なのだろうか？）

「ニホンゴ？ 話しているから言葉は通じてますよ。この世界で生まれたものには皆言葉の加護がありますからね。会話は誰とでもできますよ。文字はいくつか種類があるので……って常識です」

（コトバノカゴ……？）

「え。言葉の加護ってなんですか？」

再び疑問に思ったことを口に出す。自己紹介を始めたことで再び話題が逸れてしまっているのだが……

「……」

「……」

（……どうやらこれも常識というもののようだ。）

「……とりあえず、森であったことを先に聞いていいですか？」

逸れてしまった話題を元に戻すべくフランシエシカはきりだした。

「……………そうですか」

ハジメが森での出来事をフランシエシカに説明すると、彼女は沈痛な面持ちで一つ頷いた。ハジメが話をしている間フランシエシカは特に口を挿むことなく黙って聞いていた。

「ええ。あれはなんだったんですか？ 見たことのない動物だったんですけど」

「それはおそらくクルオルウルフだと思う。最近あの森で目撃されていた魔獣ね。私もあの魔獣を討伐しにディゴウの森に行ったんだけど、現場の様子と貴方の話を聞いたところもう死んでるようね」

「……………？ 死んでるって……………そのクルオルウルフ？ とか言う」

（僕が死んでいないのだから何かあったのだろが、死んでいるとはどういうことだろうか。話し方からすると死体の確認をしたわけではなさそうだけど。）

「ええ。おそらく貴方の魔力の暴走で跡形もなくなね。酷いもんだったわよ。普通の人間の魔力が暴走したところであそこまで被害が出ることなんてないのに。精確には分かんないけど視た限りじゃ貴方の魔力は私以上ね。いえ、たぶん貴方より魔力が高い人なんて居ないんじゃない？ 貴方本当に人間なの？」

（魔力？ 暴走？）

「人間ですけど……。それより魔力ってなんですか？ そんなもの無いと思いますけど」

魔力というとファンタジーとかでよく聞く単語だ。物語の中ではよく聞く言葉だが、実際にそんなものがあると聞いたことは無い。先ほどから神の名前だとか魔力とか聞いていると何故か変な事に巻き込まれているような気がしてくる。

（……宗教の勧誘だろうか。）

「……貴方それ本気で言ってるの？ さっきから常識も知らないし」「いや、常識と言われても。知らないものは知らないですし」「そう。……そういえば貴方何処から来たの？ 常識も知らないし何処かの山の中で暮らしていたのかしら？」

（なんだか失礼なことを言われた気がする。……まあ良いけど。）

「街に住んでましたけど……日本です」「ニホン？ 聞いたこと無い国ね。えっと……この地図のどの辺りかしら」

フランシエシカは部屋の棚から折りたたまれた少し茶色掛かった紙を引っ張り出す。地図らしいそれを広げてハジメに見せる。

（日本は太平洋の……太平洋……の……）

「……えつとこの地図って何処の地図ですか？」「……世界地図だけど」

見たこと無い地形の描かれた世界地図らしきもの。大陸のようなも

のは三つ。ハジメはどの大陸の地形も見ることが無い。地図に書き込まれている文字も読めない。

「ははは、冗談きついですね。こんな世界地図見たことないですよ」

「……」

「はは……は……」

「……」

再び二人の間に重たい沈黙が落ちた。

「異世界……ね。本当にそんな所があるのかしら」

フランシエシカに森に来る以前のことを説明した。今まで居た世界がどんな世界だったのか。そして、どのようにして死んだのか。

「いや、僕も分かりませんよ」

本当に分からない。しかし、今が現実だというのならそういう事なのだろう。元の世界で銃で撃たれたことも、この世界で生きていることも。

（あちらの世界はどうなっているのかな。日本のニュースなんかで「行方が分からなくなっているのは日本人留学生の四季一さん。現場に所持品と共に血痕が残されており……」なんて報道されているのだろうか。そもそも死体は残っているのだろうか。）

「その話が本当なら、貴方はそちらの世界で死んでるんじゃない？」
「まあ、あの痛みは本物だったけど」

（傷が残っていないということは別の肉体なのだろうか……治っただけなのか。）

「そちらの世界で死んで、原因は分からないけど此方の世界にその姿で転生した。そう考えるべきでしょうね」

「あの傷で生きていられるとは思えないよね……もう戻れないかな」

身内も居ないため、あまり困ったことにはならないだろうが、バイト先とか大学とかにはそれなりに迷惑が掛かるかもしれない。

「少なくとも異世界へ行ける、なんて話は聞いたことが無いわね」

この世界でもそんな話は聞いたことが無いようだ。帰る方法を探しながら此方で暮らしていくしかないということだろう。

（……向こうの世界にあまり未練も無いけど。）

「そっか……これからどうしようかな」

「とりあえず、この世界のことを話すから。それから考えましょう？」

「そうですね」

とりあえず此方の世界のことを聞いてから考えるのもいいだろう。魔力なんてものがあるくらいだから魔法なんかもあるだろう。

少しわくわくしてきたのはとりあえず内緒だ。

第2話<サルトクリゼ>

神々の加護の恩恵を受けた世界、サルトクリゼ。この世界で生まれたものは皆、様々な加護の恩恵を受けて暮らしている。その最たる物が魔法である。この世界に暮らす者は誰一人例外なく魔力を保有している。最もその資質は個人で大きく異なるのだが、資質を持たないものは魔力こそあるが自ら魔法を行使することが出来ない。

魔術の属性にも様々な物がある。最も一般的な属性は五つで、無属性、地属性、水属性、火属性そして風属性だ。資質を持つ者の殆どはこの五つの属性の特性を示す。

更に極稀に空属性、時属性、光属性、影属性に資質が有る者も居る。現在確認されているこの四つの稀属性の魔導師は空が二人、光が五人、影が七人。時の属性を持つものは二十年ほど前から確認されていない。

魔術の資質を持つ者の多くは一つから三つの属性に目覚める。二つの属性の資質を持つ者が最も多く、次が一つの属性、更に少なくとも一つ三つの属性となる。四つの属性を示すものは更に稀で、確認されているものは世界でも二十人程。稀属性を持つものは皆この内に含まれている。

この資質の組み合わせは様々であり、発現し易い属性順に並べると無>地>水Ⅱ火>風>>影>光>空Ⅱ時と考えられている。この資質は生まれた時から決まっいて生涯変わることはない。

この大陸“カドラグニス”は様々な種族が国家を形成して暮らしている。エルフ族、獣人族など、人間族以外の種族も存在する。人種の多くはその他の種族を亜人種と呼び区別している。カドラグニスに点在する国家の殆どは人間族の国家であり、亜人種の人権を認めていない場合も多い。

他種族より魔力も力も弱い最も人口の多い人間族は、国家を成して

暮らしている。魔力の低い人間族は寿命も140〜200年と、獣人やエルフなどの他の種族に比べて短命だ。他種族間の半血種族も存在し、その場合も魔力によって大体の寿命が決まっている。この半血種族も人間には亜人種とされて区別される。

ハジメが今居る此処はカドラグニスの大国の一つであるサルクノール王国にある一都市から少し離れた森の中にある。サルクノールには他種族も暮らしており、他の国家よりは人間族以外にも比較的暮らしやすい国である。

フランシエシカはエルフと人間の半血種^{ハーフ}で、現在82歳らしい。これは長寿のエルフとしてはまだまだ若く、人間の年齢で考えると成人年齢《16歳》より少し上程度である。最も人間からすれば知識も経験も豊富なため人間の基準で考えることは出来ない。またフランシエシカの魔力はエルフの中でも高い部類に入り、人間との半血種だがエルフの特徴が濃く現れている。

「フランシエシカさんはエルフのハーフなのか」

「ええ。半血種だから耳はエルフより少し短いけどね」

「へえ……触ってみても良い？」

やはり気になってしまふ。触らせてくれないだろうかと目を輝かせながら尋ねる。

「良いわけないでしょう」

「いや、やっぱり気になるといつか。前の世界には人間しか居なかったし」

（獣人も居るということは猫耳やら犬耳なんかも居るのだろうか……。爺さんの家で昔飼っていた犬の耳も気持ちよかったし、触つてみたいものだ）

「自分の耳を触ればいいでしょう。そんなに変わらないわよ」
「むう……」

（そうだろうけど、エルフの耳ということに価値があるんじゃないか……）

未練たらしくフランシシカの耳を眺めていると少し顔を赤くしながら話題が変えられる。

「他に聞きたいことはない？」

「んーと、僕の魔術の属性は分かるのかな？」

魔法があるのなら使ってみたいと思うのは当然だろう。しかし適性がないと魔力があっても使えないらしいためドキドキしながら質問する。

「それは実際に調べてみないと分からないけど」

「どうやって調べるの？」

「簡単な魔術を使ってみるしかないわね。暴走したのだから何かしら適性はあると思うけど」

「……暴走したら何か属性に適性があるって分かるの？」

属性があるだろうと言われて少し安心したが、その根拠が分からなかった。

「ええ、属性を持つもので魔術を学んでいない者は大体子供の頃に一度は暴走するの。貴方ほどじゃないけど部屋の中ものが壊れる程度にね。洗礼みたいなものよ」

「ふーん。……そういえば最初魔力の暴走でクルオルウルフとかが死んだはずだって言っていた気がしたけど」

「貴方の暴走は最悪だわ。周りの森ごと消し飛んでいたもの。家の中や街の中だとすごい被害が出ていたでしょうね」

「え……」

「五十メルデくらいの範囲の地面が抉れてその真中辺りに貴方が倒れていたの」

「五十メルデ？」

「ん？ あー……この部屋の端までが四メルデくらいかしら」

（ということは一メルデが大体１メートルかな？）

「って、五十メルデ！？」

五十メルデが五十メートルだとすると相当な範囲だ。それが消し飛んでいたらしい。

「ええ、森の一角が綺麗になくなっていたわ。その中心にいたんじや、クルオルウルフも一緒に死んじやったんじゃないかな」

「……」

「とりあえずまた暴走しないよう魔力のコントロールを身に付けなさい。属性の魔術が使えるようになれば暴走することも無くなるでしょう」

「……どうやって？」

コントロールを身に付けると暴走も起こり難い。魔力の制御の方法が分からないとどうしようもないが。

「それは私が教えてあげるわ。人間はあまり好きじゃないけど、貴方は異世界の人間だし興味があるわ。魔力もかなり多いみたいだし」

フランシェシカはあまり人間が好きじゃないようだ。人間の多くは

他種族を差別しているみたいだから仕方ないのかもしれないけど、昔何かあったのだろう。

「いいんですか？」

「いいわよ。まあ貴方の体調と魔力が整ってからになるけど。暴走の後は意識を失うし四、五日は魔力を使わない方がいいから」

「よろしくお願いします。フランシエシカさん」

「フランでいいわ。貴方のこともハジメって呼ぶから。あ、それと貴方は簡単に家名を名乗ったけど初対面の相手にはあまり名乗ることとは無いからね。覚えておいた方が良いわ」

（やっぱり貴族なんているんだな）

「初対面の人に名乗らないんですか？ 僕の世界では普通に名乗っていたけど」

「貴方の世界はどうか知らないけど、此処だと家名がある人間は貴族とか王族とか、他にもいるけど少ないのよ。信用できない人間に名乗る必要は無いわ」

「フランも家名はあるの？」

「ええ、フランシエシカ・ラザズ。それが私の名前」

「貴族？」

「貴族は人間の爵位でしょ。エルフの家名はあまり関係ないわ」

「ふーん。……家名を教えてくださいってことは少しは信用されてるって事かな？」

「……」

若干きつめの視線でにらまれた。美人な分、睨まれた時のダメージは大きい。

「じよ、『冗談です』」

「……しばらくこの家で暮らすことになるだろうからね」

「え、此処に住んで良いの？」

「何処に行く気よ。此処から街まで歩いたら三日ほどかかるわよ？
行きたいなら別にいいけど」

「ここに居させてください」

「……他に聞きたいことは無い？ 魔術の練習も早くても明後日からになるし、聞きたいことが見つからなかったら明日聞いてくれてもいいけど」

「うーん……この世界で暮らしていくために知っておいた方が良
事はないかな」

すぐには思いつかなかったため今日のお勧めを聞く。

「……色々あるわよ。言葉は通じるけど文字は覚えないとだめね。
ギルドなんかで依頼を受けるにしても読めないとだめだし。魔術と
一緒に覚えていった方がいいわ。文字が読めれば本も読めるしこの
世界のことも色々調べられるでしょう」

「文字か……。言葉が通じるのに文字は読めないのは不便だね」

「言葉は加護を受けた時点でこの世界の誰とでも話せるからね。貴
方が喋ってる言葉も違和感無いわよ？」

「……そういえばそうかも。なんか日本語で話してるけど日本語じ
やないみたいなの……」

（そもそも今考えているのも何語で考えているのか分からなくなっ
てきた……思考がこの世界の言葉に統一されたのかな……）

「文字は幾つか種類があるって言ってたけど、それは？」

「この世界は言葉も共通だから文字も基本的には共通よ。古代文字
なんかもあるからね。覚える必要は無いかな」

文字は一種類だけでいいのか。元の世界じゃ考えられないな。ということは通貨なんかも共通だったりしないのだろうか。

「それじゃあ、お金について」

「お金か……ちょっと待ってね」

言って部屋を出て行き、戻ってくるとフランは小さめの袋を一つ持っていた。ベッドの上に袋から取り出した硬貨を四枚並べる。

「この銅貨が基本で一エイド。銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚でこの小金貨。小金貨が十枚でこの金貨一枚ね」

一緒に聞いた宿の代金や食事の値段から通貨の価値は銅貨が百円くらいで小金貨が一万円くらいの価値があることが分かる。小金貨から通貨の単位が変わるようで、小金貨は一アルド金貨とも言われている。

通貨には他の金属も入っていてその比率は決められていてギルドとというのが出来て暫くして世界共通になったようだ。偽造は魔術で簡単に分かるようになっていたとの事だ。

「あとは……さっきも言ってたギルドって言うのは？」

先ほどの会話に出てきた気になる単語をあげた。

「ギルドは幾つか在るわ。一番人が多いのは冒険者ギルドね。これは世界中にあるわ。後は各国で魔導師ギルドや商人ギルドなんかがあるかな。商人ギルドは国を跨いで在る事も多いけど、魔導師ギルドは基本的に自国内にしかない」

「冒険者ギルドか……定番だな」

異世界ときたら冒険者ギルドだろう。知っていました。

第3話<ギルド>

「冒険者ギルドか……定番だな」

「ん？ なに？」

小さく呟いた為フランには聞き取れなかったようだ。

「いや、魔導師ギルドが国内だけって言うのは？」

「魔導師ギルドは基本的に独自の魔術の研究なんかをしてるから、他国に設置するメリットは無いわ。優秀な魔導師は自国で困っておくのが普通だから。といっても、冒険者ギルドにも登録している魔導師も多いからあんまり意味無いけどね。それから冒険者ギルドと魔導師ギルドや商人ギルドの重複は出来るけど魔導師ギルドの重複は禁止されているわ。」

「フランもギルドに入ってる？」

「私は冒険者ギルドとこの国の魔導師ギルドに入ってるわね。魔術学院に入った人はみんな魔導師ギルドに入らされる。私も昔それで登録したの。今は基本的に冒険者ギルドで依頼を受けてるから魔導師ギルドはあまり関係無いわね」

「それじゃあ僕も冒険者ギルドに入る方がいいのかな？」

「それは自由にすればいいと思う。お金稼ぐなら冒険者ギルドに入って依頼をこなしていくのが早いかな」

冒険者ギルドの依頼は魔獣の討伐や護衛、他にも雑用やら色々ある。ハジメを見つけたのもギルドの依頼でクルオルウルフを討伐するためにデイゴウの森に来ていたらしい。デイゴウの森に着く直前に森で強力な魔力爆発が起こって駆けつけたところにハジメが倒れていたようだ。その後ハジメに結界を張って周囲を検索しクルオルウルフが居なかったためハジメを自宅に保護し、ギルドに森の様子を報

告。ハジメの存在を隠して原因不明の損害があった事と、周囲にクルオルウルフが居なかった事を報告し、現在ギルドで現場の調査が行われているようだ。もちろんフランの依頼は達成したことはなかった。ギルドの調査完了を待って依頼の扱いが決まることになっている。

ちなみにディゴウの森は此処とはかなり離れていて、此処には無属性と風属性の複合最上級魔術の転移で来たらしい。属性の組み合わせが必要で難しく、消費魔力が多いためエルフでも何度も仕えないらしい。

空属性だと単体の属性で空間転移があるようだ。

「そっか。やっぱり冒険者ギルドってランクがあるのかな？」

「ええ。低い方から白、黄、青、赤、緑、黒、白銀かな。色の元は魔術の属性って言われているけど本当かどうかは知らない」

「フランは何処？」

「黒ね。白銀は十人くらいかしら。白銀なんかは特別な事がないとなれないわ」

一番多いのは赤で緑から黒にいくと少なく、白銀は稀。稀属性を持つて冒険者をしている魔導師で白銀は二人。空が一人と光が一人であとは剣士やら魔導師が数人いるらしい。

冒険者ランクはギルドカードの模様の色が変わるらしい。フランのカードを見ると何か文字と文字のないスペースに綺麗な模様が描かれていた。植物がモチーフのような模様が右下角から文字を避けながら全体に広がっている。この模様も一人ひとり微妙に異なる。

フランが魔力を通すと、更に文字が浮かんできてそれを避けるように模様が変化する。この文字は本人の魔力でのみ浮かび上がり、自分の証明にもなる。

「白銀になるとギルドからの指名の依頼が主になって何処かの国で

落ち着いて活動することが少なくなるらしいわ」

「フランは白銀を目指してるの？」

「そんな面倒なことしないわ。黒で十分に稼げるし」

どうやら面倒なことは好きではないようだ。街から離れた森にいるのも人付き合いが面倒だからなのか。

聞いてみると近くの街にも一軒家を所持しているらしく、依頼を受ける際は其処を拠点にして活動しているという。ギルドランク黒という危険度は高いが高額の依頼も多く、複数の拠点を持っている者もいる。フランはこの森の家と街に一軒、離れた別の都市にも一軒持つているが一年の多くはこの家で過ごすことが多いとのことだ。

「これくらいかしら？ そろそろ夕食の時間だけど」

「それじゃあ最後に食事について」

食事の話が出たので気になることを聞いておく。

「食事？ 夕食ならこれから用意するけど？」

「一日何食かな？ 前居た所では三食だったんだけど」

「私たちも三食ね。二食や四食の所もあるけど、冒険者はみんな三食じゃないかな」

「よかった。二食とかだったなら耐えられないから」

冒険者は朝食事をして移動し、昼に休憩を入れて食事。夜営の準備をして夕食を食べるというパターンが多い。何度も食事の準備をするのは移動の効率を下げてしまう。

「それじゃあ夕食にしましょうか。他に何か聞きたいことがないか考えておいて」

準備をするからとフランは部屋を出て行った。

暫くしてフランが食事を持って部屋に入ってきた。

夕食のメニューはパンとシチューのようだ。器から湯気が上がり美味しそうな香りが漂って来た。

「動けるでしょ？ こっちに座って」

部屋にあるテーブルに食事を置いて着席を促してくる。ハジメはベッドから起き上がってテーブルの方に近づく。フランも席につき、一緒に食事を始める。

「いただきます」

「……？」

「あー食事前の挨拶みたいなもの。この世界では何かある？」

「そうね……神に感謝の気持ちを伝える言葉を言うところもあるかな？ わたしは面倒だからしないけど」

「そうなんだ。あんまりしない方がいいか」

「するならこの世界の作法でやったほうがいいわね。異世界の習慣を色々やってたら目立つちゃうかもしれないから」

ハジメも異世界出身であることを広めようとは思わないため素直に頷き食事を始める。

「美味しい」

「そう。ハジメの世界での食事がどんな物か分からなかったから、口にあったようなら良かった」

「こんな料理は元の世界にもあったよ」

シチューに入っている野菜は中まで火が通っていて軟らかく、味がよく浸み込んでいた。フランはパンを少し千切ってシチューに浸けて食べていた。ハジメはパンを千切ってみるが地球のパンほど軟らかくなく、フランと同じようにシチューに浸して食べる。パンの改善が必要なようだがパンの作り方は知らない。

（こんなことならパンの作り方を調べておけばよかった……。何かで読んだことも有る気がするけど思い出せない）

この世界でも柔らかいパンがあることを願いつつパンを口に運ぶ。一人暮らしをしていたので料理はある程度出来るがパンを自宅で作ったことはない。

食事を終わるとする事が無くなった。まだ日が暮れてあまり時間が経ってないため夜遅い生活をしていたハジメは暇を持て余していた。

「フラン。今から時間あるかな？」

「あるけど、どうかした？」

「今から文字とか教えてもらっていいかな？」

「いいわよ。すぐ覚えられるわけじゃないだろうけど、言葉と意味が分かるからある程度覚えたら簡単に読めるようになるでしょう。読みながら口に出したら自然に意味が分かるんじゃないかな」

言葉の加護がある為か文章を言葉に出来れば意味が分かるらしい。文字の数は比較的多いみたいだが言葉の意味が分かる大人なら簡単に習得できるそうだ。

（英語の文章を見ても意味が分からなくても正確に読み上げれば意味が分かるようなものか？）

なんとも不思議な事だ。これならこの世界の識字率はかなり高くなりそうだ。音読できれば意味が分かるのだから。しかし人前で音読は結構恥ずかしいので、見ただけで意味が読み取れるようにしっかりと勉強しておこう。

フランに習っている間、英語で喋っている意味を日本語で考えているような不思議な感覚がした。慣れれば文章の発音と意味と思考が一致するらしい。文章を見ただけで理解するのは暫く先になりそうだ。

「それじゃあもう遅いしこのくらいにしましょうか」

「もうそんな時間？　ここがどのくらいの時間で一日が経つのか知らないから分からないな」

「時計があるから見てみる？　時間の感覚が違うと慣れないわよね」
「そうだね」

時計を借りて見てみると円が四つに区切られている。この目盛りの意味を聞いてみると一目盛り三刻で、最初の目盛りが朝の鐘の時間、次の目盛りが昼の鐘、最後の目盛りが夕刻の鐘の時間に合わせてあるということだ。何処の町にも鐘があるらしく、国ごとに鐘の時間が決まっているらしい。国が変われば鐘の時間が少しずつ異なるらしいが、朝、昼、夕の鐘の数はどこも同じらしい。

短針と長針があるが見ているだけではどのくらい時間が進んだのか良く分からない。明日から体感の時間を確かめておく必要があると思うだ。

「時計は必要だと思うからある程度お金を稼いだら買っておいたほうが良いわね」

「そうだね。武器なんかも買わないといけないかな。魔術の発動には何か必要になる？」

「初級魔術くらいなら無くても発動できるけど……それ以上だと魔

導具が必要な」

「魔導具？」

「ええ、私が使っているのはこの杖ね。ここに宝石が取り付けられているでしょ？　これが魔導具の核になっているの。杖はおまけみたいな物かな。材質や形状、刻印なんかで性能も値段も変わってくるけど一番大切なのはこの宝石。魔宝石っていうの。そのままね」

「それは特別なもの？」

「魔宝石には特定の属性でしか使えないなんてことはないけど特性はある。大体色で分かるけどこの魔宝石は水の特性ね」

綺麗な藍色の宝石が杖に埋め込まれている。見ただけでその特性が分かるようだが良いのだろうか。

「私の属性は水と風と無属性。他の魔宝石も杖の内部に埋まっているわ。三属性の適性を持つ人は二属性に比べて多くないからどうしても特注の一点ものになってしまう。この杖は元々風と無属性の杖だったけど貰い物なの。デザインや材質、中の魔宝石も結構良い物だから水属性の魔宝石を追加したの」

一点ものを特注するのが面倒だったのだろうか。

閑話くフランシエシカく（前書き）

フランシエシカ視点。

閑話＜フランシェシカ＞

人間を拾った。

元々デイゴウの森にはクルオルウルフ討伐の依頼を受けたためやってきたのだ。森に到着する直前、森の中で爆発的に魔力が広がるのが分かった。一瞬遅れて爆発音が聞こえてきた。急いで駆けつけた先にその人間が倒れていた。

人間の周囲は酷い有様だった。森の中ほどにあり木々が生い茂っているはずの場所が、五十メルドほどの範囲に木が一本も残っていなかった。地面は抉れ地表がむき出しになっていた。

原因を探るためにも、この人間に事情を聞かなければいけないだろう。おそらく魔力の暴走が起こったのだろうが、確証が無い。

周囲を探索・走査しクルオルウルフの反応が無いことを確認し、人間と共に転移で自宅に戻る。

汚れを風の魔法で飛ばした後、客室のベッドに人間を寝かせた。その人間は見たことも無い真黒な髪の色をしていた。顔は整っており寝顔は安らかだった。

一度ギルドに戻り森で爆発痕を見つけたことを報告。クルオルウルフが森に居なかった事から爆発に巻き込まれたのでは無いかと報告しておいた。ギルドから調査の依頼がでるらしい。

ギルドに報告した後、適当に買い物を済ませて自宅に戻る。人間の様子を確認するが目を覚ます気配は無い。魔力の暴走の後は一日か二日意識を失うことが多い。あれが暴走の痕だとすると二、三日は目を覚まさないだろう。

人間が目を覚めたのは保護した日から二日たったテルトゥリアー巡月の七日だった。

「美味しくないよ!？」

「……っ!？」

起きた瞬間大声で意味の分からないことを叫んで起き上がった。夢でも見ていたのだろう。

「目が覚めました？」

「え？」

人間に話しかけると此方を向いて固まった。人間の目は髪と同じ黒色で髪と同様見たことが無かった。

「早速ですが、森で何があったか聞いてもいいですか？」

「……」

人間は此方を見たまま動かない。話を聞いていないらしい。

「……聞いてます？」

「あ、すみません。聞いてないです」

返ってきた返事はそんな言葉だった。

人間はハジメというらしい。

常識が全く無かったが異世界の人間だった。異世界の存在は聞いたことが無かったが嘘を言っている様子は無いため、信じてもいいかもしれない。

話をしている最中ハジメの視線はしばしば私の耳に注がれていた。触って良いかと聞かれたが他人に触らせるようなものじゃない。ハジメの世界にはエルフなどは居なかったらしく、興味があるようだ。

人間は少なからず私たちエルフや獣人などを亜人種と呼び敬遠する。酷いところでは差別したり、奴隷として痛めつけたりされている。私はあまり人間が好きではない。それに私は半血種のためエルフにもあまり良い顔をされないことさえある。

冒険者ギルドに入ってこんな森の奥で暮らしているのも他人を遠ざけるためだった。ある程度お金があれば一人でゆつくり暮らしている。歳の離れたエルフの姉には王都と一緒に暮らさないかと昔から言われているが断り続けている。

ハジメは不思議な人間だった。異世界の人間だからだろうか、エルフと聞いても特に驚いた様子も無く私の耳に対して興味があるらしくチラチラと視線を感じる。その様子が少し可笑しかった。

簡単にハジメの魔力を調べてみたがエルフの私や、姉なんかより遥に膨大な魔力を持っていた。多いことは分かるがどのくらい多いのか私でも分からなかった。彼が目立ちたいのじゃなければ、魔力量を誤魔化す魔導具を渡した方が良くかもしれない。

「……家名を教えてくれたってことは少しは信用されてるって事かな？」

この言葉を聞いた時驚いた。人間に自分から家名を教えたことは今まで一度も無かった。姉の知り合いで相手が知っていることはあったが、自分から名乗ったことは一度も無い。話の流れで名乗ってしまったようだ。つい睨んでしまった。ハジメは別に悪い事はしてい

ないのに。

その後も適当に必要な知識を教えている内に、何時も夕食をとっている時間になった。他人に食事を作ることもあまり無かったし、ハジメは異世界の人間らしいので口に合うものが作れるか自信が無かった。

幸い同じような料理は食べたことがあるらしく安心した。料理も美味いと言ってくれた。何時もより若干力を入れて料理した甲斐があった。

翌日、客室に様子を見に行くとハジメはまだ眠っていた。朝食の準備が出来たので呼びにきたのだが寝顔を見ていると起こすことが憚られる。暫く眺めていたが、我に返ってハジメを起こす。

朝食はパンと簡単なスープだ。食事中にハジメはパンの固さを頻りに気にしていた。どうやら地球というところではもつと軟らかいパンを食べていたらしい。この世界にも柔らかいパンが売っているか聞かれた。

他にも食材について色々聞かれたが、どれも聞いたことが無い物で、知らないと言うとがっかりされてしまった。仕方が無いじゃない。長い間此処で暮らしているんだから、あまり他の国に行ったりしないのだ。

今度出掛けたら何か有るか注意してみておこう。

そういえば誰かと暮らすのはすごく久しぶりだった。何時以来か覚えていない。ハジメは人間だが一緒に居ても何故かいやな感じはしない。冒険者をやっている以上人間ともそれなりに関わるが、ハジメのような感じは初めてかもしれない。

きつと異世界人だからだ。

食事が終わればハジメに文字を教えたり、家の中を適当に案内したりして過ごした。お風呂が無いのか聞かれたが、この家には無い。この家は姉の知り合いの空属性の魔導師に設置してもらった。私は家の近くの川で沐浴しているし、こんな場所に家を用意するだけでも大変だったのだ。建てた当時はお風呂のことなんて考えたことも無かった。

お風呂が無い事を知ったハジメはすっかり落ち込んでしまった。聞いてみれば地球では毎日お風呂に入る習慣があったらしい。取りあえず今日もお湯で体を拭くだけで我慢してもらおう。

ハジメの魔力も大分落ち着いてきたようなので明日には魔術適性を調べることは出来るだろう。

一度魔力が暴走したら魔力を制御する練習をしていなくても自分の中の魔力を感覚的に知ることが出来る。人間はエルフや獣人と違い、子供の頃に魔力制御を学ばないものが多いので、子供の内によく暴走する。魔力も低いのであまり影響は無いが、暴走がきっかけで魔術を学ぶようになる。

魔導具は魔力制御の刻印のある指輪でいいだろう。指輪は無属性の発動具だが特に問題ない。私には少し大きく普段使わないものだから無属性が使えるようならハジメにあげても良いかもしれない。

閑話くフランシェシカく（後書き）

描きたいことを書くのはやっぱり難しいですね。

次は魔術適性を調べます。

第4話＜魔術適性＞（前書き）

書き溜めているわけじゃないので話がどうつながるか……

二、三章くらいの話までの概要Word2ページくらいしか書いてないし、設定もその都度なので矛盾が無いようにできるだけ気をつけていますが、何かあったらごめんなさい。そのうち設定はまとめようと思います。

まだお金使っていないのに銅貨を十円くらいに少なくなってきた……

第4話<魔術適性>

魔導具には大きく分類すると二つに分けられる。

一つは魔導師が自身の魔術を発動させる、発動具として用いられるもの。一般的には術具や発動具などと呼ばれる。

一つは魔力を持つ人間が魔導具に刻まれた魔術を発動させる、道具のように用いられるもの。此方の方が術具などより圧倒的に使用者が多いため一般的に魔導具と呼ばれている。

魔宝石は基本的に前者の魔道具に使用される。後者にも用いられることはあるが魔宝石自体に術を刻印する必要があり、一度刻印を施すと魔宝石の特性が一つの魔術に固まってしまい、別の術への再利用が不可能になってしまう。そのため制作費だけ上がり、不要になった場合には格安の値が付く。また、魔導師が同程度の魔宝石を使用して発動する魔術ほどの効果も出ないため、効率が悪い。そのため特別な意図が無い限り魔宝石に刻印を刻むことは無い。

魔宝石を使用する魔導具にも様々な形状が存在する。

フランが愛用している魔導具《発動具》は一メルデ程の杖の形状をしている。形状もただシンプルなのではなく、美術品としても価値がありそうな流麗な形状をしていた。

「これは？」

「無属性の発動具よ。属性を調べるだけなら必要ないと思うけど、その魔導具は魔力制御の刻印が入れてあるから少しは魔術が発動しやすくなるはずよ。無属性が使えるようならそれはハジメにあげる。」

現在、ハジメが手にしているのは指輪の形状をしている小さな発動具だった。広めのリングに小さな宝石が填められている。刻印とやらを探してみるがハジメには分からなかった。

「刻印は魔力で刻まれているのよ。普通の人間の目に見えるわけ無いじゃない。私は魔力走査出来るから刻印の魔力が分かるけどね。これは人間の半血種である恩恵ね。」

「人間の？」

「ええ。人間は他の種族にある固有の能力を持っていないの。獣人なら身体強化、エルフは魔力特性かな」

どうやらエルフは魔術に対して高い資質を示す魔力特性というものがあるらしい。同じように獣人も高い身体能力と身体強化の能力が種族として備わっているということだ。

「人間は固有の能力を持っていないけど、個人としては偶に能力を発現させる人もいるのよ。最もその多くは魔術でも代用可能なものだけど、能力を使用する際の魔力消費は格段に小さくなる。私はハーフだからあまり期待してなかったけど運良く魔力走査が出来るようになった」

魔力を感じるだけなら魔導師は可能らしい。フ란の魔力走査は魔導具に刻まれた刻印でも詳細に内容を読み取れるそうだ。刻印の詳細まで読み取れる能力は珍しいようで、走査まで行かない魔力検知などは比較的多い。魔力検知や、走査が出来る人間は魔導師ギルドや商人ギルドに多く所属している。

「へー。僕にも何かあるのかな？」

「それは分からないわね。私も最初に発動するまで予兆も何も分らなかったから。何かがきっかけで能力を自覚して発現することが多いみたい」

「なるほど……」

感心しながら指輪を指に填めてみる。フランが填めると親指にしか合わないらしいのであまり使っていないみたいだ。色々填めてみたが左手薬指にぴったりだった。

「何処に填めているのよ！」

赤くなりながら怒られる。どうやら此方の世界でも薬指の指輪は特別なものらしい。填める前に少し考えたがそういう習慣がないと勝手に思い、問題ないだろうと薬指に填めたが失敗だったようだ。

「薬指が丁度いいから」

「……」

フランは何か言いたいようだったが俯いてしまった。それ以上何も言ってこなかったのでとりあえずこのまま適性を調べることにしよう。

後で聞いたことだが左手薬指は愛の証を示し、結婚や婚約の際に指輪を贈るらしい。このあたりは地球の習慣と同じだった。

「……それじゃあ魔術適性を調べましょうか」

魔術適性は基本的に下級魔術を使用するのが一番早い。今ハジメがしているような魔力制御の指輪などを使えば魔術の未経験者でも比較的簡単に下級魔術を使用できるようになる。

「大切なのは発動のイメージだから。詠唱を教えるからその言葉から魔術のイメージをしてみて」

魔術の発動には必ずしも詠唱は必要ではない。発動のイメージと魔力が最も大切になる。詠唱はイメージを固めるための物で、高位の

魔導師は中級程度までなら無詠唱で発動できる。詠唱は個人でイメージしやすい様に変更することも多いようだ。

『封書』

フランが封筒のようなものを取り出し呪文を唱えると一瞬魔法陣が現れて、その封が閉じられた。

「……」

「……これが無属性の簡単な術かな。他にも念話なんかがあるけど最初に使うのはこの位がいいんじゃないかな」

なんとも地味な魔術だ。今回はただ封をしただけらしい。嚴重に封書をする場合は開封の方法を教えた相手にだけ開封できるように術を組む。普通の手紙などは封蝋などが一般的らしい。

「魔力の込め方は魔術のイメージをしながら発動具に集中するの。息を吐く感覚に似てるかな。一度暴走したから魔力の感覚はあると思うけど、その感覚を息を吐くように発動具に注いであげるの」

体の内側に意識を集中すると、確かに以前には無かった感覚がある。体の感覚器官が一つ増えたような感じがする。

『封書』

開いた封筒を受け取り封が閉じるようにイメージしながら呪文をかける。するとフランの時と同じように封が閉じられた。魔法陣は見えなかった。

「初めての魔術が地味……」

「無属性は適性があるわね。風と水は手本を見せてあげられるけど地と火と稀属性は呪文とイメージを伝えるから、自分でやってみるしかないわ」

その後風、水とフランの魔術を手本にしながら続け、魔導書を読み上げてもらい地、火、光、影、空、時と下級の魔術を使っていた。

「地属性以外全て適性があるなんて……。魔力からして異常だけど、これは……」
「……」

結果、ハジメの魔術の適性が異常に高いことが分かった。現在最も有名な空属性の魔導師でも四属性しか適性が無い。しかしハジメには八属性に適性があった。歴史上最も優れた魔導師は九属性全ての適性があったと伝えられているが、ハジメはその魔導師に匹敵するほどのものだった。

「これはあまり知れない方が良いと思うわ……」
「だよね……」

このような高い資質を持つ者があると様々な国が囲い込もうと画策する可能性は高い。実際、稀属性に適性を持つものの殆どは何処かの国で囲われて他国に流出しないよう、半軟禁状態にある。それが全ての稀属性となると先が見えている。

「人前では火、水、風、無から三つほどに絞って使用するようになるべきだと思う」
「どれがいいかな？」

「暫くここに住むようなら風と無属性で転移魔術が使えるようにした方がいいわ。ハジメの魔力なら街に行くにも転移魔術を覚えて移動した方が楽だし」

火属性はそのまま火や熱を扱う。水属性も液体などの扱いが一般的で、他に治癒の魔術にも効果を発揮する。風属性も治癒に効果があり水と組み合わせると複合治癒魔術が可能になる。風は気体を扱う特性もあり、一般的な結界等も風属性が代表的だ。無属性は最も使用者が多く、他の属性との組み合わせるものが多い。軽量の物の転送などは無属性単体で発動できる。念話なども無属性術者が必要になる。

「火属性なんかは魔導具があれば火はおこせるし、水と風がいいかもね。私が言うのもなんだけど水と風と無属性があれば、よほどの事が無い限り大丈夫よ」

「そうしようかな」

「一人で冒険者続けるにしても転移が使えれば都市間の移動もかなり楽になるしね」

「……ここに居ちゃいけない？」

「それは……いいけど。冒険者になって家賃と食費ぐらい払いなさい」

「うん。よかった。……指輪も貰ったし」

「……」

最後の言葉には特にコメントは返されなかった。

正直自分でもおかしいと感じている。今まで異性に対して此処まで積極的に接したことは無かった。二日間フランと過ごしたが彼女の隣はすごく居心地が良い。初めてフランを見た時の感覚が忘れられない。

この世界でフランしか知り合いがないので不安になっているのだ

ろうか。初めてのことはかりで浮かれているのか。

（嫌われないように気をつけよう……）

この二日間のことを思い出しながらふと気になったことが浮かんた。

「そついえば、魔導具つて自分で作れるの？」

「ええ。何か作りたいの？」

「せつかく火属性が使えるからお風呂でも作ろうかと」

「お風呂？ 昨日言っていた？」

「この世界には蒸し風呂とかしかないのかな？ 湯船に入ったりしない？」

「湯船はあるけど普通の家にはないわね。水も大量に必要だしお湯を温めるのも大変だから」

「お湯を魔法で沸かしたりしないの？」

「火の魔法で温めるって事？ 魔導具を使うにしても人間の魔力じゃ効率がよくないわ」

「ということは魔力が高ければ出来る？」

「出来るでしょうね」

とりあえず実現は可能なようだ。魔力についてはフランからお墨付きを貰っているから大丈夫だろう。

「フランは普段どうしてるの？」

「私は普通に沐浴してるけど……この家の近くに小川が流れているから」

フランは沐浴しているらしい。この二日間ハジメはお湯で体を拭いていた。

せつかく火属性や水属性に適性があつたので浴槽という名の魔導具

でも作ろうと思う。

お風呂のことを考えながら文字の練習用に何枚か貰った紙にお風呂について書き込んでいく。檜木とかあれば檜木風呂が作りたい。檜木風呂の妄想を絵に描きだしていく。

「……………何やってるの？」

フランが手元の紙を覗き込みながらなにやら驚いた顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0626z/>

一つの異世界

2011年12月5日19時02分発行